

神の建造のための祭司職の回復

(土曜日——午前の第一の部)

メッセージ 4

ともし火をともし、香をたく

聖書：出 27:20-21, 30:7-8, 34-38, 詩 141:2, 啓 5:8, 8:3-4

I. 神の聖なる所でともし火をともしことは、祭司が行なう務めであり、祭司の奉仕です——出 27:20-21：

A. 予表において、神の聖なる所でともし火をともしことは、わたしたちがクリスチャンとして集会する正しい方法を表徴します：

1. 集会の天幕としての幕屋は、神がご自身の民と集まり、彼らに語った所であり（レビ 1:1）、召会の集会を予表します。
2. 予表において、ともし火をともしことは、召会として集会する正しい方法を指しています。集会する正しい方法は、ともし火をともしこと、すなわち、光を発することです——ルカ 11:33。
3. わたしたちが集会で行なうすべてのこと、すなわち、祈ること、歌うこと、賛美すること、預言することは、聖なる光を上らせることであるべきです。

B. 聖なる人が聖所で聖なるともし火をともし必要があります——出 27:20-21, 30:7-8：

1. 祭司は、神に対して絶対的である人であり、神によって完全に所有されている人であり、完全に神のために生活し存在する人です。あらゆる面で、またあらゆる点で、彼の唯一の関心は神です——I ペテロ 2:5, 9, 啓 1:6, 5:9-10。
2. ともし火をともし人は、神によって所有され、神によって浸透され、神に対して絶対的に生きる人です——出 27:21：

- a. そのような人が聖所で言うことや行なうことは何であれ、ともし火をともしことです。彼のすべての行動はともし火をともしことです。
- b. 聖なる祭司が召会の集会において語るとき、光が上り、聖なる所は光に満ちます——I コリント 14:19, マタイ 5:15-16, マルコ 4:21。

C. 聖所における光は、天然の光ではなく、人工的な光でもありません。それは神聖な光、聖なる光、真の光であり、神ご自身です——ヨハネ 1:9, I ヨハネ 1:5, 啓 21:23-24 前半：

1. 今日のクリスチャンは、多くの種類の天然的で人工的な光によって分裂しています——イザヤ 50:10-11, II コリント 11:14。

4. ともし火をともし、香をたく

2. わたしたちはキリストのからだの建造のために、唯一で真の光、すなわち、贖い輝く神の光の下で生き、歩く必要があります——啓 21:23. Iヨハネ 1:5, 7. エペソ 5:8-9.
3. 信者たちが集まる目的は、神の聖なる所を持つことであり、資格づけられた祭司たちがともし火をともすことによって、わたしたちは、聖所における器具の各項目によって表徴されるキリストのさまざまな面を見て、そして至聖所の中へと、すなわち、神の内側にあるキリストの深みの中へと至る道を見ます——出 25:23, 31. 30:1.
4. わたしたちは召会の集会において真にともし火をともす経験をするときはいつでも、必ず特定の要素を経験します。それは三一の神の具体化（燭台^{しよくだい}）、神聖な性質（金）、キリストの引き上げられた人性（灯心）、キリストの霊（油）です——コロサイ 2:9. IIペテロ 1:4. ローマ 1:3-4. 8:9.
5. 共に集会してともし火をともすことは、クリスチャン生活におけるわたしたちの霊的な経験のあらゆる面を含んでいます。

II. 祭司の体系の主要な任務は、香をたくことです——出 30:7-8 :

- A. ともし火をともすことは、香をたくことと関係があります——7-8 節：
 1. 祭司たちが香をたいたときはいつでも、ともし火をともしました。そして彼らがともし火をともしたときはいつでも、香をたきました。
 2. わたしたちは御言を読む（ともし火をともす）ときはいつでも、祈るべきです。ともし火をともすことは、御言を読むことであり、香をたくことは、祈ることです。
 3. 正しい祈りは、御言を読むことからの、光から生じる祈りです。御言からの光はわたしたちを照らし、正しい言葉を用いて祈らせます。
- B. 香をたくことは、神の住まいである幕屋におけるあらゆることの中心的な事柄です。
- C. 香をたくことは、祈ることを予表します——詩 141:2. ルカ 1:10-11. 啓 5:8. 8:3-4 :
 1. 香をたくことは、わたしたちが復活し昇天したキリストの中で祈り、復活し昇天したキリストと共に祈ることを表徴します。
 2. このような祈りは、実はキリストであり、わたしたちがキリストを通して、またキリストと共に神に上ることです。これは神にとってかぐわしい香りです。
 3. その香の煙は、香が燃えて聖徒たちの祈りと共に神に上ることを示し

4. ともし火をともし、香をたく

ています。このことは、聖徒たちの祈りに効力があり、神に受け入れられることを暗示します——3節。

4. キリストの中で、また香としてのキリストと共にささげられた祈りは、神の恵みの分与を管理し、神聖な行政の執行を推し進めます。

D. 聖なる塗り油が表徴するのは、キリストがすべてを含む霊として神からわたしたちに来るということであり、香が表徴するのは、キリストがわたしたちの祈りとしてわたしたちから神に行くということです——出 30:23-25, 34-38 :

1. 三一の神とわたしたちとの間の双方の往来のために、わたしたちは聖なる膏油^{こうゆ}を塗ることと、香をたくことの両方を必要とします :

a. 油塗りは、キリストの中で、またキリストを通して、神をわたしたちにもたらし、わたしたちを神聖な要素にあずかせます。香はわたしたちが祈りの中でキリストと共に、またキリストとして神に行き、神に享受を得させることです。

b. このような祈りは、同時にかぐわしいかおりで神を満足させ、神のエコノミー、神の行政を執行します。

2. 神は聖なる膏油をもってわたしたちを聖別します。それはわたしたちが複合の霊を享受するためであり、またわたしたちの祈りをもって、すなわち、聖なる香をもって神を満足させ、神の行政を執行するためです。

E. 祭司は、香を持っている人々です。彼らの働きは、おもに香をたくことです :

1. 祭司は、内側で香をたいて主と接触する人です——7-8節。

2. わたしたちはどのように細やかな方法で香をたいて、神に甘い香りをささげるかを学ぶ必要があります。

3. わたしたちがキリストを表現する方法で祈るとき、わたしたちだけが祈っているのではなく、キリストもわたしたちの内側で祈っているのです。わたしたちとキリストは、祈ることによって一となり、わたしたちが神に祈ることは、神に立ち昇る甘い香です——詩 141:2 :

a. 「キリストは香であり、また生ける水です。わたしは受け入れられ、疲れから解放されます。ここで多く祈り、多く飲み、香をささげ、川が流れ出ますように」——詩歌 587 番 8 節 (全訳)。

b. 「常に神の御前で香をたきます！ 常に神の御前で香をたきます！ 常に神の御前でともし火をともして明るくし、常に神に歌います！」——詩歌 573 番、復 (全訳)。

4. ともし火をともし、香をたく

務めからの抜粋：

祈りに対する祭司の三つの段階

今日、わたしたちが真の祭司になろうとするなら、香をたかなければなりません。これは、わたしたちが祈らなければならないという意味です。しかし祈るとは、わたしたちが神に行って、彼にわたしたちのために何かをしてくださるようお願いすることを意味するものではありません。祈りはこれ以上のものです。それはまず第一にキリストをわたしたちのささげ物として適用することを意味します。わたしたちは神に祈るとき、キリストをわたしたちの罪のためのささげ物として、違犯のためのささげ物として、他のとても多くのささげ物として適用しなければなりません。それから、わたしたちはキリストを常食としてキリストを享受し、キリストを取り入れます。わたしたちが神の臨在の中に入ることができるのは、このキリストと彼の贖いの血によります。それから、わたしたちは内側から、すなわち、わたしたちの思いや知性からではなく、わたしたちの霊の内側深くからキリストからのものを言い表します。これが祈りです。これが祈る方法です。

祈るとはキリストをすべてのささげ物として適用することであり、キリストを養いとして享受することであり、それから内側深くからキリストからのものを言い表すことです。このようなキリストの表現は、神へと立ち上る甘い香です。それはわたしたちを神の中へともたらし、神をわたしたちの中へともたらしめます。結果として、わたしたちはキリストとミングリングされるだけでなく、神ともミングリングされます。

クリスチャンはみな祈るべきであることを知っています。しかしながら、彼らは祈るべきであると常に言いますが、残念なことに、祈りの正しい意味を知っているクリスチャンはごくわずかです。祈る正しい方法は、キリストをすべてのささげ物として適用することであり、それからキリストをわたしたちの完全な養いとして常食とし、取り入れ、それから内側深くからキリストからのものを言い表すことです。これら三つの項目は真の祈りの三つの段階です。

仮にわたしたちは朝起きて祈るとします。まず第一に、わたしたちはキリストをすべてのささげ物として適用しなければなりません。わたしたちが祈り始めるとき、わたしたちは罪深いという深い責めがあるかもしれません。直ちにわたしたちは、キリストをわたしたちの違犯のためのささげ

4. ともし火をともし、香をたく

物、あるいは罪のためのささげ物として適用します。わたしたちは祈らなければなりません、「おお、父よ、わたしはとても罪深いです。しかし、わたしはどれほどあなたに感謝することでしょう。キリストは今日わたしの罪のためのささげ物であり、キリストはまさにこの瞬間わたしの違犯のためのささげ物です。わたしはただわたしの罪のためのささげ物と、違犯のためのささげ物であるキリストをもってあなたに行きます」。もしわたしたちがこのように祈らないなら、決して至聖所の中に入ることはできません。こういうわけで、とても多くのクリスチャンが霊の外側で祈っているのです。彼らは決して霊、すなわち、至聖所の中に入ることはできません。なぜなら、彼らはすべてのさまざまなささげ物としてのキリストを適用しないからです。

神と接触するとき、わたしたちはキリストをさまざまなささげ物として適用することを学ばなければなりません。このことはわたしたちが神に告白することを含みます。わたしたちはこの事柄やあの事柄において欠けており、このことやあのことにおいて間違っているということを告白しなければなりません。わたしたちはまたわたしたちの弱点をすべて告白しなければなりません。わたしたちはこれらの事柄をすべて告白するとき、キリストを罪のためのささげ物、違犯のためのささげ物、平安のささげ物、穀物のささげ物、全焼のささげ物として適用します。

第二に、わたしたちは神の臨在の中でキリストを享受する必要があります。ときどき、わたしたちは彼の御言を読むことによってキリストを享受するかもしれません。わたしたちは祈りによって御言を通して、御言を祈り読みすることを通して、キリストを取り入れ、神の御前で彼を享受します。

第三に、内側からわたしたちはキリストからのものを言い表し、表現します。わたしたちがこのように祈るとき、わたしたちだけが祈っているのではなく、キリストもわたしたちと共に祈っているのです。祈ることによって、わたしたちとキリスト、キリストとわたしたちは一になります。そのときわたしたちが神に祈ることは、神へと立ち上る甘い香となります。わたしたちがこのように立ち上る香をささげることによって祈れば祈るほど、ますます神の栄光が下って来ます。香が出て行き、栄光が下って来ます。これが真の交信、真の交流、真の交わりです。香としての祈りは神へと立ち上り、神の光である栄光がわたしたちの中を照らします。最終的に、わたしたちはキリストに満ち、神のシェキナの栄光で浸透されま

4. ともし火をともし、香をたく

す。

正しく祈るとは、主にわたしたちのためにこのことをするように、あるいはあのことをするように求めることだけではありません。わたしたちは主に行き、キリストをさまざまなささげ物として適用し、キリストをわたしたちの完全な養いとして享受します。それから、内側からキリストからのものを神へと立ち上るかぐわしいかおりとして言い表します。このような祈りだけが、神のシェキナの栄光をわたしたちの中にもたらしめます。そのとき、わたしたちは神の臨在の中でキリストを享受します。

このような祈りは時間を必要とします。わたしたちは主の臨在の中で時間を費やしてささげ物をささげ、香をたかなければなりません。香をたくには本当に時間がかかります。しかしわたしの深い感覚とは、今日クリスチャンは他のどんなものも必要としないということです。わたしたちが必要とするのは、祭司の機能を伴う祭司の体系、すなわち、すべてのささげ物を通して香をたくことです。この編を読んでいる兄弟姉妹が毎日、このような祭司の職務を実行するなら、今日の召会の状況全体は変わるでしょう。わたしたちは議論する時間を香をたくことに変えなければなりません。わたしたちは祈らなければならないと単に言うだけでは十分ではありません。それはただ祈るだけではなく、香をたくことです。わたしたちはキリストを適用し、キリストを享受し、キリストからのものを言い表すことを学ばなければなりません。これが祭司の体系の正しい祈りです(ウイットネス・リー全集 1966 年第 1 巻(下)、祭司の体系、第 15 編)。

幕屋の中心的な項目

前の編で、わたしたちは祭司の体系の主要な任務は香をたくことであるということを見ました。わたしたちが印象づけられる必要があるのは、香をたくことは幕屋、すなわち、神の住まいにおけるすべての中心的な事柄であるということです。わたしたちは、外庭があり、次に聖所と至聖所を伴う幕屋があるということを知っています。至聖所の中には、キリストの予告である契約の箱があり、この契約の箱の上で神はご自身の民と会われます。これは人が神と会うことのできる場所です。さらに燭台しよくだい、臨在[供え]のパンの机、祭司たちが香をたくための金の香壇があります。これらは幕屋の内側のものです。幕屋の外側の外庭には、他の二つのもの、すなわち、清めるための洗盤と犠牲をささげるための全焼のささげ物の祭壇があります。

4. ともし火をともし、香をたく

わたしたちはこれらすべてのものを示している幕屋の図表を見るなら、香壇が幕屋全体のまさに中心にあることがわかります。それは神の建造、神の住まいのまさに中心にあります。香壇は人が契約の箱で神と会うためにあります。

このことによって、わたしたちは幕屋の中のすべてのものが香壇のためにあることを認識することができるでしょう。ささげ物の祭壇、洗盤、臨在[供え]のパンの机、燭台はすべて香壇のためであり、香壇は人が契約の箱で神と接触するためです。

これはすべて召会の予告、影です。幕屋は、人の中の神の住まいとしての召会の予告です。今日、召会は神のための真の幕屋です。召会の中には契約の箱としてのキリストの実際があります。この契約の箱の中で、その上で、それによって神は人に会うことができ、人は神に会うことができます。召会の中で、人はキリストの上で、キリストの中で、キリストをもって神に会うことができます。しかしどのようにしてこのことはなされることができるのでしょうか？ このことはささげ物のための祭壇、命の供給のための臨在[供え]のパンの机、ともし火のための燭台を持つことによってなされることができます。これらのものはすべて香をたくためにあり、それを通して人はキリストの中で神に会うことができます。

ともし火をともし香をたく

今やわたしたちは燭台も香をたくことと関係があるということを見なければなりません。祭壇だけではなく、ともし火をともし香をたくことと結び付けられています。わたしたちは前述の聖書の箇所で見ましたが、祭司たちが香をたくときはいつでも、ともし火をともし、彼らがともし火をともしときはいつでも、香をたきました。これが意味するのは、わたしたちが御言を読む(ともし火をともし)ときはいつでも、祈らなければ(香をたく)ならないということです。香をたくとは祈ることであり、ともし火をともしとは、御言を取り扱うことです。神の言は光であるので、わたしたちがこの御言を取り扱うときはいつでも、ともし火をともします。読むことと祈ることは、一つのことでなければなりません。それらはミングリングされて一にならなければなりません。祭司たちはともし火をともしるとき、また香をたかなければなりません。

ともし火をともしないなら、祭司たちは暗やみの中で香をたくこととなります。これが意味するのは、御言を読まないなら、わたしたちは暗やみ

4. ともし火をともし、香をたく

の中で、愚かな方法で祈るということです。わたしたちには光がないので、わたしたちは暗やみにいます。ともし火の光がないなら、照らしはありません。これがわたしたちに見せているのは、わたしたちが祈ろうとするときはいつでも、まず神の言を取り扱わなければならないということです。わたしたちは聖書を読むとき、ともし火をともし、光の中にいます。そのとき、わたしたちはどのように祈るかを知ります。そうでなければ、わたしたちが祈ることは何であれ、暗やみの中にあります。

多くの時、わたしたちは自分の観念にしたがって、天然の方法で祈ります。なぜなら、わたしたちは御言によって照らされていないからです。このような祈りは、神へのささげ物として受け入れられません。わたしたちは主と接触しようとするとき、恐れとおののきの中にいなければなりません。わたしたちは自分の罪が洗い去られたということを知っていますが、もしわたしたちがまず御言を取り扱って光を受けないなら、わたしたちの性情にしたがって、天然の方法で祈るかもしれません。このような祈りは主を怒らせることです。それは彼にとって甘い香りではありません。ですから、わたしたちは祈る前に御言を読んで、照らされなければなりません。わたしたちはともし火をともしなければなりません(ウイットネス・リー全集 1966 年第 1 巻(下)、祭司の体系、第 16 編)。

光は命から出て来る

臨在[供え]のパンの机は燭台のためです。なぜなら、机は命のためであり、燭台は光のためであるからです。ヨハネによる福音書第 1 章 4 節は言います、「彼の中に命があった。この命は人の光であった」。命は光です。臨在[供え]のパンの机には命の供給があり、この命から光が生み出されます。光は命から来ます。わたしたちが命の供給を享受すればするほど、ますます光の中にいます。命は光を生み出します。もしわたしたちが命の供給としてのキリストにあずかって享受しないなら、暗やみの中にいます。わたしたちはキリストの命の供給で満たされるとき、光を得ます。命の供給の享受は光を放ちます。

ある人々は聖書を読むとき光を受けますが、光を受けることは、ある程度、命の享受にかかっています。わたしたちは命を持てば持つほど、ますます聖書から光を受けます。わたしたちは命において成長し、円熟すればするほど、ますます光を受けます。光は命の成長にかかっています。わたしたちは命の供給としてのキリストを享受すればするほど、ますます光を

4. ともし火をともし、香をたく

得ます。

香をたくことは光を必要とし、光を得ることは命の供給を必要とします。わたしたちは正しい方法で香をたくためには光を必要としますが、光を得るためには命を必要とします。わたしたちは臨在[供え]のパン、すなわち、命の供給としてのキリストを常食とすることを学ばなければなりません。それはキリストをただ一度限り受けることではありません。すなわち、わたしたちは日々、絶えず彼を常食としなければなりません。わたしたちは決してキリストを常食とすることから卒業することはできません。わたしたちは絶えずキリストを食べて、命の供給を受けなければなりません。わたしたちが受ける命の供給は光となります。命は光であり、この光は神に香をたくために必要です。香をたくことは光にかかっており、光は命の供給にかかっています。

受け入れられる祈り

朝、わたしたちが起きるとき、わたしたちが行なわなければならない最初のことは祈りです。しかし、もしわたしたちが神に受け入れられる正しい祈り、すなわち、その中にキリストのものを伴う甘い香を持とうとするなら、すぐに祈り始めることはできません。道はそんなに真っすぐではありません。まず最初に、わたしたちは血を適用しなければなりません。言い換えると、わたしたちはささげ物の祭壇に来て、すべてのわたしたちの欠点、罪、汚れを告白しなければなりません。これらの事柄すべてを告白した後、わたしたちは清められるために血を適用しなければなりません。

わたしたちは告白して血を適用するとき、わたしたちの養いとしてのキリストを享受します。贖うキリストは、わたしたちを供給し、養い、食べさせるための臨在[供え]のパンとなります。わたしたちはキリストを常食とすることによってこのようにキリストを享受するとき、満足します。自然に、この内なる満足から何か輝いて、照らすものがあるようになります。それがともし火をともしことです。そのとき、わたしたちは神に言い表し、述べることを知ります。このようにすれば、わたしたちが神に言うことは何でも甘い香です。それは、甘くてかおり高い要素としてのキリストを伴うその霊から出て来ます。わたしたちの祈りは、ちょうど神への香のようです。

わたしは、あなたがたに予表について教えを与える意図はありません。わたしの負担は、あなたがたに神と接触する正しい方法を示すことです。

4. ともし火をともし、香をたく

これは一種の教えではなく、神の臨在の中で神と接触し、キリストのすべての豊富を享受して経験する正しい方法をあなたがたに示すためのある種の指示です。

今やわたしたちは道を見ました。わたしたちは告白することによって、ささげ物の祭壇から始めなければなりません。祭司が聖所の中に入る時はいつも、ささげ物の祭壇を逃れることはできません。わたしたちは、昨日それを経過したので今日は必要はないと言うことはできません。違います、昨日わたしたちはそれを経過しました。そして今日わたしたちは依然としてそれが必要です。わたしたちが聖所の中に入るときはいつでも、ささげ物の祭壇に触れるだけではなく、そこにとどまることも必要です。わたしたちはそこにとどまり、血を適用しなければなりません。それは、贖う方がわたしたちの享受となるためです。わたしたちがまさにわたしたちの罪、失敗、誤り、悪い行ない、短気、弱点すべてを告白し、キリストの贖う血を適用して、わたしたちを清めるなら、直ちにわたしたちは内側で、この贖うキリストがわたしたちの内なる享受と養いになったという感覚を持つでしょう。

そのようにしてわたしたちが彼を常食とするとき、彼はわたしたちの臨在[供え]のパンとなります。ここに机があり、机は祝宴を意味します。わたしたちはしばらくの間、キリストを享受するためにここにとどまらなければなりません。わたしたちはあまりにも性急に祈り始めてはならず、まずキリストを常食としなければなりません。それから、この養い、すなわち、わたしたちが取り入れたキリストは、わたしたちによって同化されなければなりません。これには一定の時間がかかります。

机で祝宴を享受した後、わたしたちの養いとしてのキリストはわたしたちを燭台にもたらしめます。命としてキリストの養いは、わたしたちが必要とする光を生み出します。内側のものがわたしたちを照らし、わたしたちを神の臨在の中へともたらしめます。そのとき、わたしたちが表現するものは何でもキリストのものです。それは、甘いキリストのさまざまな面のかおり高い香りです。わたしたちは、わたしたちの存在の中へとキリストを同化するとき、神に言い表すためのキリストのとても甘く尊いものを持ちます。そのとき、わたしたちの祈りは香壇の上であり、神によって受け入れられるために天に昇ります。これが受け入れられる祈りです。

4. ともし火をともし、香をたく

ともし火を整える

燭台は、油が燃えることによってわたしたちに光を放ちますが、油が燃えることに関連する実際の問題があります。燭台は、油が燃えて光を発するために芯しんを必要とします。わたしは、ある若者たちが、芯が何であるかを知らないことを恐れます。芯は、ゆるくねじられて、柔らかく紡がれた綿の束であり、ともし火の油やろうそくの溶けたろうを吸い上げて燃やすのに用いられます。

燭台は純金のひとかたまりです。臨在[供え]のパンの机は、香壇のように金と木から造られています。契約の箱さえ金と木から造られています。過去、わたしは燭台がただ金だけであり、他には何もなかったと考えていました。しかし最近、主はわたしに、燭台さえ金だけではないということを示しました。もしそれがただ金だけであったなら、燃えなかったでしょうし、わたしたちに光を放たなかったでしょう。燭台は、植物の命のものを持たなければなりません。それは、芯となるためのとても柔らかく、細いものです。芯なしに、どのようにして金の燭台は光を放つのでしょうか？ 金は、光を放つために、植物、すなわち、植物の命のものを必要とします。金と芯に油を加えると、光を放ちます。

わたしが若かったとき、わたしたちはいつも石油ランプやろうそくを用いました。わたしたちは常に芯に関して問題を持っていました。芯が燃やされすぎるとき、炭化します。この炭化し、焦げた芯は燃えかすと呼ばれます。燃えかすは芯の残りの部分から切り離されなければなりません。それゆえ、出エジプト記第25章において、芯取り皿と芯切りばさみがあります。祭司たちは芯切りばさみで燃えかすを摘み取り、すべての摘み取られた燃えかすを芯取り皿に入れます。

ときどき、わたしたちは命の供給としてキリストの享受を持ちます。そして、この享受は真にわたしたちを光にもたらしめます。しかし、まだ光を放ちません。これは、芯が燃やされすぎたからです。それは焦げて、とても古く、炭化しています。ともし火を整えることは、芯のすべての炭化して残っている部分を切って、摘み取ることを意味します。

燭台はすべて金で造られています。金は神聖な性質を表徴し、芯は不純物を除かれた人の性質を表徴します。それはただ人の性質であるだけでなく、不純物を除かれた人の性質です。不純物を除かれた人の性質が神聖な性質と油と協力するとき、光があります。しかし、ときどき人の性質は

4. ともし火をともし、香をたく

あまりに古くなり、焦げすぎてしまい、そんなにうまくいきません。それは芯を切り、切り離し、摘み取ることを必要とします。

わたしたちは主に接触するとき、ささげ物の祭壇にとどまり、失敗を告白して血を適用することから始めなければなりません。これは、わたしたちにキリストを享受させ、キリストを常食とし、養いを受けるための机にわたしたちをもたらすのに良いのです。それから、命の供給はわたしたちを光にもたらしめます。しかし、わたしたちが照らしの下にいるとき何度も、何か古すぎることを認識します。それは洗われたり清められたりする必要はないのですが、芯を切られ、摘み取られ、切り離される必要があります。昨日は良い芯であったのですが、今朝は焦げすぎてしまいました。

三年前、ある兄弟姉妹は新鮮な芯でした。しかし今日、彼らはちょうど木炭のように炭化してしまいました。五週間前、ある姉妹たちは、ちょうど新鮮で新しい芯のようでしたが、今日、彼女たちは炭化しています。今、彼らは適切な芯ではありません。彼らは摘み取られ、切られる必要があります。彼らは血を必要としませんが、すべての燃えかすを取り除く必要があります。そのとき、彼らは新鮮な芯となり、鮮明な光を放ちます。おそらく、昨日でさえ、わたしは正しい芯のようにとっても新鮮で、油を燃やし、光を放っていましたが、今朝、わたしは焦げすぎています。わたしは炭化した芯となり、正しい光を放つにはあまりにも古くなってしまいました。

ともし火を準備する

燃えかすを切り離すことは、ともし火を「整える」ことを意味し、ともし火に油を供給することは、それを「準備する」ことを意味します。ともし火が一晩中燃えた後、朝に祭司はそれを整えなければなりません。これは、彼らがすべての燃えかすを切り離し、芯の炭化した部分を取り除かなければならないことを意味します。その後、夕方に彼らは十分な油でそれを満たすことによって、ともし火を準備しなければなりません。もし油が足りないなら、消えてしまいます。

ときどき、芯は新鮮ですが、油が足りません。ですからわたしたちは、ともし火を整えるだけでなく、準備する必要があります。わたしたちは芯を切るだけでなく、油を供給する必要があります。油はその霊を表徴するので、これはわたしたちが燃えるためにますますその霊が必要である

4. ともし火をともし、香をたく

ことを意味します。

わたしたちがこれらのことすべてを主にもたらすなら、指示する霊がわたしたちにすべての問題を示すとわたしは信じます。わたしたちは性急に事を行なうことはできません。近道はありません。疑いもなく主は求めに応じることができますが、わたしたちはそんなに早くすることはできません。わたしたちはささげ物の祭壇にとどまらなければならない、次に臨在〔供え〕のパンの机に向かって曲がり、しばらくの間主を食物として享受します。それから、わたしたちはともし火に向かってもう一度曲がらなければなりません。ときどきわたしたちは、芯の炭化した部分すべてを取り除くためにともし火を整え、ときどき油を供給しなければなりません。そのとき、それは適切で十分な光を放ちます。わたしたちがどのように主に何かを言い表し、どのように神に受け入れられるかを知るのはそれからです。

わたしたちの短気、罪、失敗は告白されなければならない、血は適用されなければなりません。芯の古くて焦げすぎた部分は摘み取られなければなりません。わたしたちはきれいな芯でなければならない、油の不足に注意しなければなりません。そのとき、わたしたちは適切な芯と十分な油を伴うともし火を持ちます。これによって光を放ち、その光の下でわたしたちはどのように祈るかを知ります。このようにして、わたしたちは神の臨在の中へと入り込みます(ウイットネス・リー全集 1966 年第 1 巻(下)、祭司の体系、第 17 編)。